

---

# 異世界盗賊譚

ウタヘビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界盗賊譚

### 【Nコード】

N2350BA

### 【作者名】

ウタヘビ

### 【あらすじ】

空き巢の常習犯 九条くじょう 九十九つくもはある政財界の大物が住んでいた屋敷に忍び込んだ。

そこで見付けたのは一つの指輪と手紙。

手紙には政財界の大物が実は異世界から渡って来た異世界人であり、指輪の力で大成した事が記されていた。

九十九は手紙の内容を信じ、異世界へ渡る事を決意するのだった。

## 第0話 「異世界へ消えた盗賊」

「ふう…、しけてやがるな…」

窓の隙間から入り込む僅かな光だけが照らす薄暗い部屋の中を一人の男が動いていた。目つきは鋭く、その整った顔立ちを損なわせる為に配置されたとしか思えないものだった。男の鋭い目は部屋の中をせわしなく動き、何かを探しているようだった。

「何も無いじゃない…、何が希代の傑物だよ」

男はため息を漏らして床を蹴ると、積もった埃が舞い上がった。

男の名前は九条くじょう 九十九つくも。この世界のダニのような存在…いわゆる空き巣と呼ばれるものだった。

「こんなところが仙石せんごく 楼賀ろうがの最後の住処とはね。

寂しいもんだ」

仙石 楼賀。希代の傑物…、魔王、帝王と幾つもの呼び名を持っていた政財界の大物である。突如政財界に姿を表し、その莫大な資金を元に政財界を瞬く間に掛け登り頂点を極めたが、その出自は謎に包まれており、死して尚、話題の事欠かない人物である。

その最後の住処がこの寂れた洋館だというのだから、その

「突然、政財界から姿を消して、田舎に引きこもった先…ここを見つけたというから、来たもののめばしいものは何もないか」

世間では死亡した際、騒ぎとなったが、その終の住処は誰の目にも触れる事がなかった。さぞかし色々な物が放置されているのだろう

と思っていたのだが…、何も無い。在るのは価値の低いボロボロな家具ばかり。こんな物を持ち帰っても二束三文にもなるまい。

「大慌てで来たつてのに何の収穫も無いとは…、情報屋に騙されたか？」

先日、知古の情報屋からこの屋敷の情報を入手して、これは宝の臭いがすると、直ぐさま来てみたのだが…。

「はあ…」

先ほどより深いため息をついて九十九は近くの棚に手を付いた。

ズズツ…。

「っ！？何だ！？」

体重を載せた途端、棚が石臼を擦るような音と共に棚が動き出した。

「こいつは…」

何かに呼ばれるかのように九十九は棚をその動きのままに押し進めて行くと、棚の裏から隠し棚が姿を現した。

棚には小さな小箱が一つ。  
何の装飾も無い、木星の小箱。手作りのような煩雑な作りをしている。

九十九はその箱を手にとると蓋を開いた。

「指輪が一つ、か…。しかし、大した値打ち物には見えないな」

銀製と思われるこちらも装飾一つ無い指輪を窓の外から漏れる光に当てると長い時間放置されていた割に、鋭く光を反射させた。

パリリ、と一枚の折り畳まれた紙が地面に落ちた。  
落ちた紙を広げて見る。

「ん？何だ…。っ！？これは…」

その古い紙の右下に書き込まれた署名に驚愕する。

「仙石 楼賀…」

その署名と証明印からこの紙に書き込まれている文章は間違い無く仙石 楼賀が書いたものだろう。彼の手書きの文章となれば、それだけで少なからず価値がある。或いはこの指輪以上に。

九十九は更にその文章の内容に価値が無いものかと視線で先の文字を追う。

- - - - -

この手紙が人の手に渡る時、私は既に死んでいることだろう。

手紙と共に指輪をしまっておく事にする。それを貴君に…この手紙の読み手に送ろう。

この指輪は「異界転移の指輪」と呼ばれる、何処かの世界で作られたものだ。

その名の通り、この指輪を身につけたものは異世界へ渡る力を身につける事が出来るというものだ。

貴君がそれを信じるか信じないかは自由だが、私もまた、別の世界からこの世界に渡って来た所謂、異世界人だ。

私は元の世界に絶望し、本当に欲するものを手に入れる為に渡って来た。

異世界を渡る事が出来るのは一人に一度だけ。つまり、一度渡れば元の世界に戻る事は出来ない。

だが、世界を渡る事で様々なものをその人間にもたらすとされている。

私がこの世界に渡って来た際には、数十トンにも及ぶ金塊と銃や刀剣類といった様々な武器の数々。私が元々居た世界にあつた魔法の力、魔道具、魔導書。上げれば切りがない程の財を与えてくれた。

そして、この世界に渡って来た本当の理由。

そう、生涯の伴侶たる女性を見付ける事が出来たのだ。

私の地位も名誉も愛する人も全てはこの指輪の力のお陰で手に入れた。

だが、私も年を取り、愛する妻も他界してしまった。

この指輪も今の私には無用の長物だ。

故にこの指輪を貴君に譲ろうと思う。

勿論、この指輪を売り払うも、捨てるも貴君の自由だ。

だがもし、貴君がこの世界に絶望し、本当に欲するものがあるというのならば、この指輪を使うと良い。

指輪の継承者たる貴君に幸いあらん事を。

.....

「これはまた…」

口から漏れ出たのはそんな呻きにも似た言葉だった。

九十九もそれなりに小説やマンガ、ゲームを子供の頃に遊んだ人間だ。異世界の話等、ありきたりで馴染み深いものだった。だが、それが自信の目の前に置かれたとなると話は変わる。それも政財界の大物の手紙で語られるとなると、誰かにドッキリでも仕掛けられているのではないかと疑ってしまう。

「だが、こんな胡散臭い嘘を付くような人物ではなかったはず…。それもこんな凝った仕掛けまで用意してとなると…真実だということか？」

だが、手紙の内容が真実であったとして、どうするべきなのか？ 九十九にとつて、この世界は何の価値も無い世界だった。幼い頃に親に捨てられ、孤児院で同じ境遇の子供たちの中で育てられた彼に取って、この世界は地獄そのものだった。大人になってからもその出自から録な仕事にも就く事が出来ず、今ではこうして空き巣をする始末である。

「俺には確かにこの世界に何の未練も無い」

欲しいものが無い。  
愛するべき人が居ない。  
信じられる何かが無い。

「なら……」

そしてその日、九条 九十九はこの世界から姿を消した。  
誰に気付かれる事も無く。

## 第1話 「異世界の門出」

「ここは…」

九十九が目を見開くとそこは、シンと静まり返った森の中だった。

「ここが異世界…なのか?…」

森は所詮、森に過ぎない。

植物の違いの分からない九十九に取って異世界なのかそうでないのか判別する方法が無い。

ただ、先程まで屋敷とは異なる風景に、自身が何処か別の場所に移動したという事だけは理解していた。

「仮にここが異世界だとしてもまずは人の居る場所に行かなければ何も分からないな」

移動を開始しようとしたところで、左手の人差し指に身に付けた指輪…「異界転移の指輪」に目が行く。

「そう言えば、異世界に渡った際に何か恩恵があるみたいなのが書いてあったな。

まずは俺が何を得たのか、それを確認しないとな」

辺りを見回すが、金塊も銃器、魔法らしきものも何も見当たらない。自身の身体一つ、それだけだ。

「…何も、無い?」



そこには木々の高さと同等の…凡そ4メートルに及ぶ巨大な獣が二本の足で立ち上がっていた。

「ブオオオオオオオオ!!」

前足を上に掲げる事でその姿は更に威圧感を増す。

そのシルエットはまるで熊のようだ。だが、その身を構成する全てがそれを否定している。

全身を深い青色の甲羅のようなものが覆っており、毛ののようなものが何も無い。

まるで、熊が全身を鎧で包んでいるように見える。

それは、まさに…

「ばけ…もの…」

明らかに以前の世界には存在しない生物。

あまりの巨体にただ足が竦み再び腰を地面に落とす。

「グルルルウ……」

前足を降ろし、四足歩行になったその化け物は、九十九を中心に回り込むような動くをする。

それは正に獣が獲物を狙う姿そのものだった。

「あ、あうあ…」

九十九はただ後ろに下がるように身体を動かし、何か武器になるようなものは無いかと後ろに付いた手で辺りを探す。

だが、都合良くそんなものは無く、ただ、手の平に広がる気持ち悪い汗が地面の土と混じり合い、不快な感触を伝えて来るだけだった。

「武器…、武器、武器、何でも良い…、こいつを殺せる武器を…」

「グギャアアアア!!」

化け物が観念しるとばかりに咆哮を上げて、飛び掛かって来た。

「俺に武器をくれええええ!!!!」

九十九は叫びと共に右手を前に出した。

そこには金属製の何か握られていた。

咄嗟の事でそれが何か判別出来ないまま、その指に力を入れると、

バシユシユシユツ!!!!!!

何かがその金属物から迸った。

どれだけ時間が過ぎただろうか。

静かになった空間の中で九十九はただ呆然と目前で沈黙した化け物を見ていた。

化け物は死んでいた。

顔に無数の穴が空き、原型が分からない程に潰れていた。

「助かった…」

やっとの事で言葉を吐き出し、立ち上がる。

そして、右手に握っていた金属物を見る。

「これは…」

それは金属製のボウガン…いや、正確にはボウガンは会社の名前で、クロスボウが名前だったか…、それが自身の手の中にあつた。

「一体何処から…」

辺りに転がっていた形跡は無い。

そもそも地面に落ちていたものを拾った記憶も無い。

化け物の全面に突き出した手の中に突然現れた、そう表現するのが正しい。

「私とその武器を選択致しました」

「!?!」

突然、女性の声が聞こえた。

だが、何処にもその姿は無い。

『私、異界転移の指輪に組み込まれた人工人格で御座います』

「指輪がしゃべっているのか!?!」

あまりの事に指輪を凝視する。

『その通りで御座います。』

新規契約して頂きました、九十九様で御座いますね』

「あ、ああ、そうだが…」

元々この指輪が普通で無い事は手紙を読んで知ってはいたものな  
さか指輪と会話をする事になるとは思わず、九十九は混乱した。

『先程、九十九様はあの魔獣を殺す武器が欲しいという要求をさ  
れましたので、私はその要求から九十九様に使用出来る最適の武器を  
選択し、お渡ししました』

「指輪が武器を出したって事か。

一体、その武器は何処から…」

『私が管理致します、九十九様の宝物庫から取り出したものです。』

これは九十九様が世界を渡る際に手に入れたもので、九十九様が  
自由にご使用出来るものです。

しかし、その数は膨大である為、私をご要望に最適な品を宝物庫  
よりお運び致しました』

「成る程…これが、あの大富豪が得た恩恵という訳か。

ところでこのクロスボウは何なんだ？

無我夢中だったとはいえ、何度も引き金を引いたが、その度に矢  
のようなものが射出されていた。

普通のクロスボウなら一本セットしたら一本だけ撃てるものだろ  
う?。」

あの時、一本しかこのクロスボウから矢を射る事が出来なかったな  
ら、あの化け物を殺しきる事は出来ず、今頃殺されたいだろう。  
いや、そもそも”矢”が放たれたのだろうか？

今も目前に小さな山のような怪物の姿はあるが、その矢が刺さった  
と思われる場所には深い穴が穿たれているだけだ。

『今、お持ちになられているクロスボウは、こちらの世界では魔具と呼ばれる、魔法の道具の一種になります。』

この魔具は魔石と呼ばれる魔素を多分に含んだ物質をカートリッジに入れる事で魔力の矢を射出するというものです。

魔石が内包する魔素量の分だけ矢を射出する事が出来ます。

今回セットしてありましたのは、主にこの世界で見付けられる標準サイズの魔石である為、約50本分の矢を射出する事が出来ます。ただし、標準サイズとはいえ、僅かな誤差が生じますので、45本の場合もあれば、55本の場合もあります。ご使用の際は全てを使い切るという方法を探らず、ある程度使用したところで魔石を交換する事をお勧め致します。』

「成る程」

あんな化け物の居る世界だ。化け物に襲われている最中に矢が切れたりしたら最悪だ。

「40本程度で交換するのが良さそうだな」

『それが宜しいかと…』

「取り敢えず、今居る場所はかなり危険な場所のようだし、移動しようと思う。」

また、何かに襲われるかも知れないし、武器は常に持ち歩きたい。それと予備の魔石も欲しい」

『承りました。』

予備の魔石を10個入れたこちらで標準として使われる馬皮のウエストポーチと、クロスボウを止めるベルトをご用意致します。』

指輪が口にするのと同時に腰にはウェストポーチがセットとベルトが身につけられていた。

「こいつはスゴイ…が、何だこれは…」

気付くと先程まで着ていた服とは違う物を九十九は身に纏っていた。

『この世界の標準的な服装です。』

先程までの服装ですと、人に遭遇した際、非常に目立ってしまう為、変更させて頂きました』

「そいつはご親切にどうも…」

どうもゴワゴワとする肌触りが気持ち悪いが、まるで西部劇のカウボーイのようで恰好は良い。

右手に握っていたクロスボウを腰のベルトに掛け、歩き出す。

「さて、この世界で俺が本当に欲しいモノが見付かるのかね……」

九十九は異世界の第一歩を踏み出した。

## 第2話 「魔獣の解体作業」

『ちよつと待って下さい』

「つつと、いきなり出鼻を挫かれた…」

旅の始まりと思った途端これだ。

何事も思うようにいかないものだ。まさに人生。

『申し訳ありません。』

ですが、今説明しておくのが最良と思いましたが、

指輪に謝られてもしょうがないと、九十九は直ぐに気持ちを切り替える。

「それで、何か重要な事なのか？」

『この魔獣…クラストヘア甲殻熊クワガタについてです』

「ああ、この化け物か。」

甲殻か…、確かに名前の通りの姿だな」

『この甲殻熊はこの森周辺で最も危険な魔獣とされているようです。凶暴性もさることながら、鉋物のように堅い外皮を持つ為に、通常の刃物や矢、鈍器でも狩るのが難しいようです。』

通常の場合は集団での囲い込みにより動きを封じ、魔法で外骨格を破壊した後、通常武器で止めを刺すようです』

「確かに普通の刃物じゃ、弾かれるのが関の山だな。」

しかし、このクロスボウは効いたみたいだが、魔法の矢つてのはそんなに強いのか？」

『ご要望通り、甲殻熊を射殺す事が可能な威力となっております。』

しかし、九十九様は銃器の扱いは僅かにあつたようですが、クロスボウの使用は始めてのようでしたので、追尾性能を持ったものを選択しましたので、威力はやや低めのものとなっております。』

「成る程。確かに俺はクロスボウなんて使うのは始めてだからな。普通のを使用していたら命中したか怪しいところだ。」

しかし、威力が低いって事は更に威力が高いクロスボウとか、銃も宝物庫にはあるって事なのか？」

『今回選択しましたクロスボウ：『ブレイズフィッシュ光剣魚』以上の威力を持ちますものは複数御座いますが、九十九様の熟練度が低い為、使用不可となっております。』

「熟練度？つまり、こいつを使いこなさないとそれ以上の性能のものを使う事が出来ないって事か？」

『そのようになっています。』

近接武器に関しましても同様に、現在使用できますものはこれだけとなっております。』

指輪の言葉と共に右手の中にナイフが握られていた。

「これは…」

革製の鞘に収められた大型ナイフ。

鞘から刃を引き抜くと、黒い刀身が姿を現す。

光を吸い込むようなその黒々とした刃を九十九は目を細くして見つめた。

「吸い込まれてしまいそうな位、深い闇の色だな」

『この刀剣は『蟻帝刃（アントエッジ）』と呼ばれるもので、通常の刃物のように切断する為に使用する事も出来ませんが、魔力を流し込む事で魔術障壁を作り出す事が出来ます」

「防御用がメインって事か。」

「こいつも使って行けば…」

『より攻撃主体の武器が使用可能になります』

「そうか。それなら、これも身に付けておくか」

九十九は腰のベルトの背中側にナイフを取り付ける。

『武器の話はここまで致しまして、話を戻させていただきます』

「ああ、この甲殻熊の方にまだ何か用があるのか？」

『甲殻熊は魔獣というカテゴリに入る生物になりますが、魔獣とは通常の獣が空気中の魔素を取り込み続けた事で変異したものを呼称します。』

魔獣や人間等、魔素を多分に取り込んだ魔法生物は魔法を使用する事が出来るのですが…』

「ちょっと待て」

そこまで指輪が語ったところで、九十九が口を挟む。

「つまり、この熊の化け物は魔法が使えたのか？…いや、使っていたのか？」

「九十九様の仰る通りで御座います。」

九十九様の世界を見れば分かる通り、このように巨大な生物は地上には本来存在出来ません」

「確かにな」

あまりにも大きすぎる。

四足歩行の状態で4メートル近く。

二本足で立ち上がった時の大きさと回りの木々のサイズから、全長は7、8メートル近くあるのではないだろうか？

全身が甲殻のようなもので覆われてはいるが、内部は通常のほ乳類とほぼ同じ。恐竜のような爬虫類とは違う。

「つまり、魔獣ってのはその巨体を魔法だか、魔力だかで維持しているという事が」

そうでなくてはこれだけの巨体だ。体重が重すぎて動く事も出来ないだろう。

『その通りです。』

他にも通常の魔法に近いものを使用する魔獣も存在します。

甲殻熊の場合でも、咆哮と共に魔力を放出する事で、三半規管を一時的に混乱させる魔法を使用します。

先程、九十九様が立ち上がる事が出来なくなったのも最初に咆哮を聞いてしまった事が原因と考えられます』

「いや、あれは…」

九十九は思わず口を濁す。  
それも一つの原因かも知れないが、それ以上に怖かったのだ…口には出さないが。

『このような魔獣、人間等の魔法生物は死後、体内を巡る魔素が下腹部で沈殿し、魔石を精製します』

「成る程、この魔物から魔石を取り出して行けということか。しかし…」

九十九は甲殻熊の巨体を見上げる。  
大きすぎる。

こんな生物を解体していたら、明日になってしまっだろう。

『そこで、これをご使用下さい』

地面に牛刀のようなものが置かれている。

『デモリッション解体蟲』と呼ばれる牛刀です。

切れ味が非常に高い刃物ですが、動く物を切る事が出来ないという難点があります」

「まさに解体用か。

どれ……うおっ!!」

何の抵抗もなく、スルスルと刃物が肉に入り込み、頑丈な甲殻を切り裂く。

『甲殻熊の甲殻は頑丈な為、武器に重宝されます。』

街で売れはお金になるはずです。

肉は非常に美味であると共に、魔素を多分に含んでいる為、身体を強化する事で有名です。魔獣を狩る狩人や冒険者、騎士などが喉から手が出る程欲しがるものですから、これも非常に高く売れるはずです』

「そして、魔石か」

そうして、九十九は腹に刃を入れた。

動物の解体はサバイバルでやった事がある為、苦手意識は無い。

その上、この切れ味の良さ、あつという間に解体は完了した。

肉や甲殻は宝物庫の方にしまってもらい、残ったのは魔石だけだ。

「しかし、デカイなこの魔石」

腹を割き、内蔵を抜く際に魔石も見付かった。

そのサイズは自分の頭一つ分はある。

ウエストポーチに入っている通常のサイズのもものが、小指サイズである事からとんでもないサイズだと分かる。

『これ程のサイズとなると、非常に稀少です。』

大きすぎる為、用途は限られますが、大都市で売れば、普通に生活するだけならば、一生お金に困る事はないでしょう」

それ程とは…。

向こうの世界では人生で一度も有り付けなかった財宝に、異世界に

渡って1分もしないうちに遭遇するとは…。

「やれやれ…」

何ともやりきれない気分になり、九十九は首を振った。

### 第3話 「森での一夜」

「ふう、慣れるには時間が掛かりそうだな」

九十九はクロスボウ・のカートリッジから魔力を消費しサイズが小さくなった魔石を取り出し、ウエストポーチの中に仕舞うと、通常のサイズのものをセットした。

『元々、クロスボウは扱いが簡単な武器ではありません。』

更に強力な武具を使用する為にも、練習を重ねる必要があります』

「へいへい」

指輪に答える九十九の眼前には大型の熱し類の死骸が一つ。  
今までクロスボウを使った事の無かった九十九は練習が必要だろうと考え、森を抜けるまでの間に見掛けた獣を狩る事にした。  
今のところ見掛けたのは3回。

そして、狩る事に成功したのが僅か1回である。

「一匹狩るのに魔石一個じゃ割に合わないよなあ」

九十九は腰のベルトから牛刀・解体蟲デモリッシュユを外すと、死骸の腹を割いた。

『フラット血吸鼠は一応、魔獣に分類される獣ですが、取り出せる魔石は小さく、肉には毒性がある為、人間には食べる事も出来ません』

「…狩り損だな」

腸を漁り、硬いものを見付けて取り出す。

それは指輪が言う通り、かなり小さな魔石だった。  
先程、クロスボウ・光剣魚から取り出した使用済みの魔石と同程度のサイズしかない。

「ま、余裕があるから良いけどさ」

取り出した魔石をウエストポーチにしまう。

小さい魔石を残しているのは後でどうにか使い道は無いかという十九の貧乏性故の行動である。

「ところで、この森はいつになったら抜けるんだ。

方角は合ってるのか？

足が痛くなつて来たんだが…」

既に3時間以上も歩いている。

元々身体を鍛えている方だが、そこそこの重さの革袋を背負い、移動している為、疲労も溜まって来ている。

その上、服装をこちらの世界に合わせた際、靴も革製のものに変わったのだが、履き慣れていない為、やや靴擦れを起こしている。

因みに宝物庫があるにも関わらず大きな革袋を背負っているのは、人に遭遇した際、旅人である事を装う為だ。流石に森の中で人に遭遇するとは考え難いが、油断はしない。

『方角に間違いはありません。方角がズレた場合、修正致しますのでご安心を。』

また、この速度で進んだ場合、凡そ3時間で森を抜ける事が出来ると思われれます』

指輪の冷酷な言葉に九十九が愕然とする。

「3時間!？」

もう、日が暮れそうだったのに、まだ3時間もあるってのか。  
こんな森の中で一夜を過ごすなんてとても出来ないぞ……」

クラストベア  
甲殻熊と遭遇した開けた場所なら兎も角、こんな木々と草に覆われた場所では、何が近づいて来ても気付く事が出来そうに無いし、逃げ事も出来ない。

『それに関しては問題ありません。』

そろそろ日も暮れる頃合いですし、お休みになられますか?』

「そうだな。」

どう対処するのもか気になるし、休むとするかな」

『では、こちらにどうぞ』

指輪の言葉が途切れた瞬間、目の前に扉が現れた。

「なんだこれは……」

突然の事に思わず後ずさる。

『九十九様の異界<sup>ルーム</sup>部屋で御座います。』

お入り下さい』

「あ、ああ……」

言われるままにドアノブを回し、扉を開く。

そこは……

「どこのホテルのスイートルームだ、こりゃ！！  
いや、最高級マンションの一室か！？」

二度とお目に掛からないと思っていた、元の世界の一室がそこにはあった。

それも最高級としかいいようがない豪華な装飾がなされた部屋が。

『九十九様の元の世界をイメージして作成された部屋です。』

以前のオーナーのローガ様の際には、ローガ様の元の世界に合わせた世界となっておりましたが、九十九様用に改装致しました』

「こいつは助かる」

まだ一日も経っていないというのに、過酷な状況に故郷が恋しくなっていた九十九には有り難いものだった。

「しかし、照明が付いてるが、電力は一体…」

『極秘事項です』

「ああ、うん、聞かないわ。」

ところで、食い物はあるのか？流石に腹が減った」

『食料は冷蔵庫に保存されていますが、先程解体した甲殻熊の肉を調理してはいかがでしょうか？』

「…あれを食べるのか…？」

正直、あんな化け物みたいなヤツの肉を食べたいとは思わないのだが。

『先程もご説明しましたが、甲殻熊の肉は魔素を多分に含んでいる為、食べた生物の身体を大幅に強化する事が出来ます。』

『まだ、街までの距離もありますし、体力上昇を考え、今のうちに食べておくのが最善かと思われれます』

「ああ、そういえばそんな事言っていたな。

『明日も歩きっぱなしになる事を考えると、食べるだけで体力が付くなら食べて見るか』

『九十九が台所に立つと、流し台に血塗れのままの甲殻熊の肉が置かれる。』

『流石に血生臭過ぎるので、水洗いし…どこから水が来ているのか疑問だが…作業台で包丁である程度の厚みに切る。それでも十分に厚みがあるが。』

『料理の腕には全く自信は無いが、簡単に焼く事くらいは出来る。つまり、九十九はステーキにして食べる事にしたのだった。』

「フライパンだけで何故こんなに種類がある…」

『何種類もあるフライパンから大型のものを取り、火を付けたガスコンロの上に置く。』

「肉は十分に軟らかい感じだし、叩く必要も無いか？

え〜と、調味料は…」

『台所を漁ると調味料がとんでもない種類出てきた。』

「これは…ラベルが貼ってあるが、どうやって使うのか分からんのも沢山あるな…。』

『取り敢えず、胡椒と塩があれば良いか』

胡椒と塩を全面に振りかけ、皿の上に放置する。  
加熱したフライパンの上に甲殻類の脂身部分ポイと投げ入れる。  
ジュワツと音を立てるフライパンを動かし、全面に脂をひく。

「おお、なかなか良い香りだ」

空腹の為か、口の中に溜まった唾を思わず飲み込む。

フライパンから煙りが出てきたところで、塩・胡椒を振りかけた麵を裏にして、フライパンの上に乗せる。

一際大きくなつた脂の弾ける音を耳にしながら、肉が焼けるのを待つ。

表面に火が通つたところで、裏面に。

更に火を掛ける。

それを何度か繰り返して焼き上がったところで赤ワインを振りかけて蓋をする。

「ふう、料理なんてあんまりやらんから、疲れるな」

向こうの世界では主に外食や総菜で食事を済ませていた為、せいぜい御飯を炊くのと、適当に食材を切つて焼くか煮る程度の技術しか持ち合わせていない。

「かなりの厚みの肉だが果たしてちゃんと焼けるだろうか？」

不安を覚えながらも九十九はただ時間が過ぎるのを待つしかなかった。

暫くの間、肉の焼ける臭いや音にグウグウと空腹を訴える腹の虫と戦っていた九十九は我慢が出来なくなり、蓋を開ける。

「さて、焼き上がったかな？」

きつね色に綺麗に焼き上がった甲殻熊の肉。  
どうやら上手く焼けたらしい。

「良さそうだな」

フライパンから皿に移し、包丁で細かく切り分けてテーブルへ。

「あ、御飯炊いてないぞ」

『炊飯器の中に炊きたてがございます』

炊飯器を開けると確かに今炊いたばかりとしか思えない白い御飯が湯気を立てていた。

「これは美味そうだ」

御飯をよそり、テーブルへ。

「いただきます」

ステーキは十分に焼いたつもりだったが、厚みがあった為か、ミニデアム・レアといったところだ。

「どんな寄生虫がいるかも分からんから、もつと火を通しておきたかったが…まあ、良い。腹が減ってはなんとやら、だ」

そのまま、肉を口の中に放り込む。

「これはっ!!」

芳醇な香りが口から鼻へ抜ける。

そして、舌の上で肉が溶ける感覚。

柔らかい肉の歯ごたえ。

「美味すぎるぞ、これ」

向こうで高級な肉を食べた事など数える程しか無いが、比較にならない程の美味しさだ。

「熊のだからって訳じゃ無いよな。」

熊の肉も食った事あるが、臭みが強い上にかなり硬かった覚えがあるし…」

『甲殻熊の肉は非常に人気のある食材です。』

しかし、甲殻熊は数が少ない上に非常に狩るのが難しい魔獣である事と、常人の身体を大幅に強化する為、通常の食材以上に高値で売買されています』

「身体強化の方は実感はないが、この味なら確かに高い値が付くのも頷けるな」

パクパクと肉と御飯を口に運びながら指輪の言葉に伝える。

『稀少な為、一般にはほぼ出回らず、自身で狩った狩人の他は、貴族やお金持ちしか食べる事が出来ません』

「そうになると、傭兵みたいな連中は自分たちでなんとか狩って食べようとするしかないな」

『しかし、甲殻の頑丈さと凶暴な性格から、死者も絶えないようです」

「まあ、あんなの相手にしたら、普通の人間じゃ返り討ちだよな」

先程の甲殻熊の姿を思い出し、憎しみを籠めて肉に箸を突き立てて、口の中へ。

九十九はそのまま黙々と食べ続け、焼いた分の肉と御飯を2杯平らげた。

「ふう、食った食った」

満腹感に満足しながら一心地すると眠気が襲ってくる。

「あ、眠い」

のろのろと立ち上がり、別の部屋へのドアを開くと4人でも寝る事が出来そうな大きなベッドを見付ける。

「ああ、もう頭が回らん…」

ベッドに倒れるように沈み込み、九十九は目を瞑った。

「あゝ、今日は色々ありすぎて疲れた…」

そのまま九十九の意識は遠のいていった。

#### 第4話 「異世界の移動手段」

「身体がとんでもなく軽い」

日が昇り始めたところで指輪のモーニングコール…電話じゃないが…に起こされた。

爽やかな朝だ。

しかし、窓の外は黒く塗りつぶされたように何も見えない為、外の天気も分からない。

「そついや、部屋の鍵もしなかったが、魔獣とか入って来る危険性もあつたのかね？」

『こちらに入ったところで、扉は消失しています。』

一時的に別の空間に入っているようなものですから、向こうから侵入してくる事は出来ません。

ただし、次元魔法などでここに移動する事は可能です。

流石にその様な技術を持った相手と敵対した場合は何処にいても同じ事ですが…』

「まあ、確かにそんな無茶苦茶されたら、どんな高度なセキュリティも意味をなさないからな」

指輪の説明を受けながら服を脱ぎ、大きなバスタブのシャワーで身体を洗う。

うん、ここのバスタブって何人用なんだ？

優に10人は入れそうな広さだが…大衆浴場か？

シャワーを浴びてすっきりしたところで元の服に着替えて、異世部屋を出る。

場所はやはり入った時と同じ森の中だった。

まだ、日が昇り始めたばかりで、森の中には日の光が届かず薄暗い。夜の香りを残した冷たい空気を吸い込み一步を踏み出した。

「まずは森を抜けないとな…」

昨日指輪は森を抜けるのに3時間は掛かると話していたはずだが、実際にはその半分…1時間半程度で森を抜けた。その事を指輪に追求すると…

『昨日、甲殻熊の肉を召し上がった事で九十九様の身体が強化された為です。』

九十九様は意識していませんでしたが、歩行速度が昨日の倍程速くなっていました』

との事だ。

確かに昨日に比べると身体がとても軽く、まるで羽根が生えたような気分だった。

「まあ、疲れも無いのは有り難い。

甲殻熊の肉を食べておいて正解だったようだな。

しかし、このまま徒歩つても辛いな。何か他の移動手段が欲しいところだ」

『宝物庫には車やバイクもありますが、この世界の人間に見られた場合、安全の保証が出来ません。こちらの世界の乗り物を用意する必要があるので』

「こっちの主な移動手段って何があるんだ？」

『基本は徒歩ですね。』

他には馬、馬車などが主流です。

やや特殊ですが魔獣に引かせる魔獣車というのものもあるようです』

「魔獣車ねえ…、あんな怪物と旅をするつても落ち着かない気がするが…」

『魔獣にも色々な種類が御座います。』

甲殻熊や吸血鼠だけ見ましても大きさや形態の差が分かると思われます』

「ああ、どうも、最初のインパクトが強くて魔獣というと、甲殻熊がまず最初に頭に浮かんでしまっただろうな。」

確かに色々種類があるなら温厚な魔獣だっているかも知れないな」

『この先の草原には野生の馬も生息するようです、馬車自体はありませんので、捕獲して、引かせる事も可能です』

「野生の馬なんて制御出来る自身ないぞ。いや、飼育されている馬でも自身ないか…」

馬に乗った事も無い自分が馬を扱えるはずなど無いのだ。

『馬を制御する魔道具も宝物庫に御座います。』

捕獲さえ出来れば馬車を引かせる事も扱いに関しても問題はあり  
ません』

「そんな便利なものもあるのか…」

正になんでもありだの状態に九十九は思わず頭を振る。

「そりゃ、これだけ至れり尽くせりなら、仙石 楼賀が一代で大成  
したのも納得だ」

暫く進むと、木々がぽつぽつと少なくなっていく代わりに地面を背  
の低い草が生い茂っている場所に出た。

「やっと草原に出たか」

前方には草原が広がっている。

見渡す限り一面が草原、何処までも続くのではないかと思わせる程、  
遠くまで続いている。

「街は一体何処だ、これだけ開けた場所なのに見えないぞ」

『街はこの草原の向こう、丘を抜けた先にあります。』

今の歩行速度ですと、1週間は掛かる予定です」

「一週間…。」

「まだ、そんなにあるのか…」

九十九はげんなりとして、肩を落とす。

「流石異世界、人が住む場所がこんなにも離れているとは…」

「仕方ありません。」

「こちらの世界では魔獣等が多数生息していますから、何処にでも人間が住める訳ではありませんから」

「普通に考えれば街を作るにしても囲いとか、防壁とか必要になるだろうしな

「簡単には人が住める場所は作れないか…」

「防壁で囲まれた街でも魔獣による被害は毎年のように発生しています。」

「小さな村等の場合、村そのものがなくなる事もあるようです」

「魔獣の脅威つてのはこの世界ではかなり深刻なものという訳か…」

「そのようです。」

「九十九様も魔獣には十分ご注意ください」

「あいよ…」

指輪に心配されてしまった事で九十九は更に肩を落とす事になった。

「うーん、向こうに馬の姿が見える」

草原の向こうで馬が草を食べているのだらう、頭を地面に垂れている。

「問題は捕獲方法だ。」

このクロスボウじゃ、殺してしまうだろうしな」

『こちらをお使い下さい』

手元に現れたのは同じ様なクロスボウ。

「これは？」

『こちらは名工が作った一般的なクロスボウです。特殊なのはセットしております矢の方になります』

「矢？」

「…確かに普通じゃないな、形状からして」

クロスボウにセットされた矢の鏃やじりは無数の蜘蛛の足のようなものを全面に広げている。

『エレキスパイダー  
電気蜘蛛の脚が鏃の代わりに付けられています。』

脚が強い力で物体に接触すると、瞬間的に電気を放出して相手を気絶させる事が出来ます』

「電気を放出する蜘蛛なんているのか…。  
しかし、このサイズで馬を気絶させる程の電気ショックを与える  
事が出来るのか？」

「電気蜘蛛の巣は10メートル以上にもなり、小さいながらも大型  
の生物に卵を産み付けて繁殖します。時には人間よりも大きな生物  
を餌にする事もある為、素材としての利便性は高いですが、捕獲が  
難しい魔獣です」

「そいつはかなり危険な生物だな。  
だが、これなら、確かに馬も気絶させそうだ」

『そのクロスボウは品質は良好ですが通常品である為、対象の追尾  
機能が在りません。  
十分に狙って射って下さい』

「光剣魚みたいに連続で射る事も出来ないし、一発勝負か。  
そうになると、もう少し接近しないとな」

九十九はクロスボウを握りしめ、馬に向けてゆっくりと歩を進めた。

「何かおかしくないか…？」

近づけば近づく程に感じる違和感に九十九は足を止めた。

『申し訳ありません。』

確認を疎かにしました。

あれは、馬ではありません。滑る者スレイブニールと呼ばれる魔獣です。』

距離が離れている為、正確な事は分からないが、明らかに通常の馬よりも大きく、全長は倍近くありそうだ。

そして、それ以上に異常な点が近くに来た事ではつきりとした。

…脚が8本あるのだ。

「あんなに脚があつて走る事が出来るのかね。

つか、この矢で気絶するとは思えないんだが…」

『恐らく難しいものと思われます。

滑る者は最上級の軍馬とされており、数は非常に稀少です。

確認しましたが、この地域での目撃例は今までにありません。』

「諦めるとするか…」

とてもでは無いが、あんな怪物馬を攻撃して、反撃を喰らったら、即死間違い無しだ。

普通の馬ですら暴れたら人間には為す術も無いというのに…あの巨体…。

『いえ、捕獲致しましょう。

滑る者は非常に剛胆な正確をしています。

幾ら近づいても逃げるといふ事は無いでしょう。…襲われる可能性はありますが…。』

「おいおい…」

九十九は指輪に思わず突っ込んだ。

意味は無いと分かってはいるのだが。

『クロスボウの矢を取り外し、こちらの矢をセットして下さい』

手の中に現れた矢を確認すると、やはり、鏃の部分が普通では無い。

「これは？」

『サンダーバード雷鳥の羽毛を鏃にまとめたものです。

電気蜘蛛の脚と同様に、衝撃を与えると電気が走るようになっておりますが、電気蜘蛛の20倍近い電流が流れるので使用には注意下さい』

「20倍って…さっきのも危なそうだったが、これは洒落にならん  
な。

と、いうかだ、これじゃ流石にあの化け物馬もショック死するんじゃないか？」

化け物馬の体格は確かに大きいがせいぜいが2倍程度だ。  
それならば、体積で考えても8倍程度だろう。  
20倍ともなれば、死んでしまう危険性も十分にある。

『問題ありません。』

通常の馬と異なり、体毛は耐熱・耐寒性に優れ、表皮は甲殻熊程  
ではありませんが、非常に硬いものです。

20倍程度では死ぬ事は無いでしょう』

「魔獣だけあって、ただデカイだけ、って訳じゃないか…」

クロスボウに新たに矢をセットし、滑る者に近づいていく。

「っ！！」

今まで下を向いて草を食んでいた滑る者の頭が上がり、こちらを見る。…が、逃げる事も襲い掛かって来る事もしない。

「自然界の生物つてのに、随分と剛胆だな」

『人間程度にはやられない…そういう自信があるという事でしょう』  
自信の力を確信する者。

「気に入らないな」

つまりは自然界にすらまともに敵がない事を意味している。  
力を持つ者への反抗…、九十九に取ってはそれが常だった。  
金を持つ者、膂力を持つ者、才能を持つ者…全てを持たざる者だった九十九に取って、それらに反抗しなければ、生きる事が出来なかった。

そして、その気持ちは異世界を渡り、恩恵を与えられたからといって簡単に変わるものではない。

「絶対に捕まえてやる…」

ペロリと舌で唇を舐めると、クロスボウを構える。

ズズッ！！

滑る者が粗い鼻息をさせて九十九を見た。

絶対の自信と力を持つ存在…だが、油断も無い。

「ちっ、気付かれたか！」

クロスボウを滑る者に向けると、馬が素早い動きで動き出す。逃げるかと思っただのも束の間、こちらに方向を変える。

「ぐっ！！！」

全身が泡立つのを感じながら、クロスボウの照準を合わせる。

「ふっ！！！」

息を短く吐き出し、照準の乱れを消す。

パシユツ！！

ゴムが弾けるような音と共に矢が放たれる。

恐ろしい勢いで接近してくる滑る者に矢が接触する。

パチツ！！と鋭い音がする。

「ブフオオオオオオオ！！！！！」

野太い雄叫びと共に滑る者が崩れる。

「っ！！勢いが止まらない！！！」

滑る者は崩れながらも慣性の法則に従い、突進を続ける。

「くっ！！！」

九十九は咄嗟に横に勢い良く飛ぶ。

同時に左手で腰の蟻帝刃を取り出し、迫る巨体に向ける。

「俺を守れ！！」

何かが眼前に広がるのを感じた直後…、ドンッ！…という衝撃と共に眼前に広がった無色透明な壁が弾ける。  
だが、その僅かな時間のお陰で九十九は滑る者に接触する事なく、横に抜けた。

「ぐあ…」

身体強化の為、想像していた以上の勢いで飛んだ九十九は、ごろごろと何度も地面の上を回転して、…止まった。

「つつ、何とか潰されずには済んだか…」

『ご苦労様です。』

滑る者が気絶している間にこれを首に付けて下さい』

頭を起こした傍から、手に握らされた首輪のようなものを見る。

『魔獣用の奴隷首輪です。』

これさえ付ければ、抵抗してくる事はありません。

それよりも急いで下さい。いつ目を覚ますかは分かりかねます』

「はいよつと」

地面から立ち上がり、滑る者に近づく。

「とんでもなく大きいな…」

間近で見るとその姿は馬とは思えない程の巨体である。体重で考えれば数トンはあるのではないだろうか…。

「これを嵌めれば良い訳か…」

ぐったりとした滑る者の首に付けると、カチリとした音がして、ピツタリとしたサイズに縮む。

『あとは奴隷契約です。』

首輪に手を当てて、所有者名・九条 九十九と名乗って下さい』

首輪に触れる。

「所有者名・九条 九十九」

『これで、契約は完了です。』

初期契約は所有者への攻撃禁止、命令受託、逃走禁止のみです。他の命令に関しては意識が戻ったところでおこないますよ』

「ふう…、これで移動が楽になるならな…。」

しかし、泥棒の俺がカーボウイの真似事とはね…もう勘弁して欲しいところだ。

早く人間の居る場所に行きたい…」

九十九はぐったりとした様子で地面に腰を下ろし、草原の向こうを見た。

まだ、建造物の姿は一つも見付ける事は出来ず、旅の続きが長い事

を思い知らされるのだった。

## 第5話 「盗賊と奴隷姫」

「いや、想像以上に楽になったな」

手綱も付けずに滑る者は馬車を引いて進むんでいた。

指輪から取り出した馬車に馬をつなげ、命令するだけで、素直に馬車を引き始めたのだ。

1時間も進むと街道に出た事で馬車の歩みも順調だ。

「人が生活している形跡を見るだけでこんなに嬉しくなるとは、人恋しいのかね、俺は…」

馬車は中に10人は乗れるのでは無いかという大型の箱馬車タイプだった。

サスペンションの良く効いた馬車の為、九十九は揺れを気にする事も無く、御者台で全身の力を抜いた。

太陽が真上に差し掛かった頃、単調だった街道に変化があった。前方に一人の男が立っているのが見えた。

「何でこんなところに人が？」

まだ、街までの距離は遠い。

街から街へ移動する旅人だったとしても、立ち止まったままこちらが近づくのを待っているのはおかしい。

『警戒して下さい。』

『盗賊の可能性があります』

九十九は腰の光剣魚を外し、カートリッジの魔石を確認すると、背

中に隠すようにグリップを握った。

「止まれ」

九十九が命令すると、滑る者は素直に言うことを聞き、ゆったりと停止した。

それを確認すると、前方の男が近づいて来る。

「おい、助けてくれ！！」

仲間が突然苦しんで倒れちまったんだ。

ちよつと馬車から降りて、こっちに来てくれ！！」

「嘘だな……」

九十九は確信を持って口にした。

「なっ！？何だよいきなり！！」

本当に病人が居るんだ、頼むから信じてくれ！！」

男が慌てて抗弁してくる。

かなりせっぱつまっているようにも見える。

だが、九十九は冷たい態度を変えないまま、口を開いた。

「俺が医者か何かに見えるか？」

病人が居たところで、俺に出来る事は無い」

「一人じゃ、動かせねえんだ！

頼むから馬車から降りて、一緒にあいつを運ぶのを手伝って！！

一番近いサリストンの街までで良いから乗せて欲しいんだ！！」

男は大きな手振りですえながら馬車に近づいてくる。

「最もらしい解答だが、病人を置き去りにして、一人で街道に立っているのは不自然だ」

「嘘じゃねえ！！」

茂みの中に寝かせてあるんだよ！！

時間が惜しい。急いでくれ！！」

あつちだと、街道の脇の茂みの中を指す。

九十九は呆れるようにして、最後の核心を突く。

「嘘だな…」

人に助けを請うのに、何故武器を背中に隠す？」

男は背中を見せないようにこちらに正面を向きながら、馬車の前から横に移動し、徐々にこちらに近づいているのが九十九には分かった。そして、その仕草で背中に見せたくないものを隠しているのが丸わかりだった。

男のその仕草は、子供が大事な物を壊した時、親から隠そうとするのと全く同じだったからだ。

「チツ！！」

さっさと馬車を降りろ！！」

男は観念したのか、背中に隠していた片刃の刃物を右手素早く握るところこちらに向けた。

十分に距離が近づいたと思ったのだろう。

この距離ならば逃がしはしない…、そういう自身があるという事だ。それは、それだけ馬車の強奪に手慣れている事を照明していた。

「へへっ！！スゲー上物の馬車じゃねえか。」

滑る者に馬車を引かせてるから何処の貴族かと思っただが、身なりは大した事無いし、一人で旅してるなんぞ襲ってくれって言うてるようなもんだ、この間抜け！！」

やっと本性を現したというべきか、口元を醜く歪ませて男は笑う。

「…お前、一人か？」

九十九は相手の豹変に全く反応しないまま、疑問を口にした。

「あ！？だからどうした、俺一人で十分だぜ。」

あいつら美味しいところ持っていきやがったからな、あいつらがお楽しみ中に俺はこの馬車を独り占めだ、ヒヒッ！！

こいつを売りや、一財産だ！」

「そうか、一人か。」

「じゃあ……死ね」

背中に隠した光剣魚を取り出し、男の頭に照準を向けると躊躇い無く、引き金を引いた。

バシユッ！！

「ガッ！！……ぐっ……」

右の眼球を光の矢が貫くと、男は驚愕の表情を顔に貼り付けたまま絶命し、地面に崩れ落ちた。

「何だ…、簡単じゃないか…」

九十九の中で了解が生まれた。

人に傷つけられる事も、人を傷つける事も慣れていたが、人の命を奪うのは始めてだった。

倫理観か、嫌悪感か。九十九が殺しを忌避していた何かが今崩れた。男が刃物をちらつかせた時、死の恐怖を感じていた。

だが、九十九の中にはそれ以上に死を与える事への不安があった。

「くっ、くはっ!!」

九十九の口元は先程の男より更に醜く三日月の笑みを作っていた。我慢が出来ない。

口元を手で押さえるが笑みが溢れてくる。

「許される…、ここなら許される」

九十九が元の世界では気付く事もなく抑えていた狂気のようなもの身体の中に膨れあがつていくのを自覚していた。

不安は払拭されたのだ。

ここでは殺して良いのだと…、殺しを楽しんで良いのだと。

『九十九様。』

どうやら、この先で盗賊が馬車を襲撃しているようです。

この男は見張りのようです。

馬車を独り占めする為に仲間連絡は送ってはいないようです。

今なら他の盗賊に気付かれる事無く逃げる事も可能です。』

「逃げる!?まさか!!」

行く!!行くに決まっているッ!!」

こんな楽しい事をここで止める気にはなれない。  
もう、踏み留まる事など出来ない。

満面の笑みを手で隠しながら、九十九は馬車を降りる。

「ここで待っている」

滑る者を茂みの置くに連れて行き、待機を命令すると、九十九は光剣魚を片手に街道を走り出した。

程なくして、前方に馬車を見付ける。

馬車につながれた二匹の馬は死んでいるのか、地面に倒れて動かない。

速度を落とし、街道の脇の草の中に身を屈める。

『目視出来る範囲では人間が5人います。』

『死体の数は8つです』

「もっと細かく分からないか？」

『距離が遠い為、私の機能では判別が不可能です』

そう言えば、さっきも馬と魔獣を判別出来ていなかった。  
近づくと判断し、背の高い草の中を進む。

左手に蟻帝刃を持つ。

意志を籠めれば魔術障壁なるものが発生する事は滑る者と相対した時に確認出来ている。

生い茂った草の中を進みかなり距離が縮んだところで足を止めた。

「っ、やめろっ！！、ぐがっ！！」

男の悲鳴。

ドサリと地面に倒れる音。

盗賊らしき男が倒れた男から刃物を抜いた。

刃を滴る赤い血が目視でも十分に確認出来る。

「や、やめなさい！！」

触るなッ！！」

倒れた男の傍で女が組み敷かれているのが見えた。

男が女の上のし掛かりながら、ズボンを下ろす。

「やるか……」

口にした瞬間には動作は開始され、九十九はクロスボウを女の上で膝立ちしている男に向けて、矢を放った。

パシユッ！！と乾いた音をさせて、飛翔した魔法の矢は追尾機能も手伝って、正確に男の後頭部に突き刺さって消失した。

男は自分が死んだ事も理解出来ぬまま、女の上に落下していくような感覚と共に意識を手放した。

「？……っ！！て、敵襲だっ！！」

目前で崩れ落ちる仲間をしばし呆然と見つめていた盗賊は、慌てて大声を張り上げた。

しかし、

「てき…ガフツ…！」

二度目の声を上げる事は適わず、口元から溢れかえるように血を漏らし、膝を折るとそのまま地面に顔を叩き付けて死んだ。

「くそつ、馬車の影に隠れていたか」

茂みの中を回り込み、九十九は声を張り上げた男に矢を放ったところで愚痴を漏らした。

「今ので3人。女が一人。最低でももう一人敵が居る」

喉を矢が貫いた事を確認し、茂みの中を移動する。  
女の上に跨っていた男を殺した直後、馬車の中を漁っていた男を射殺し終えたところで馬車の影に居た男が叫んだのだ。  
慌てて仕留めたがもう遅い。

「相手は既にこちらに気付いている。

恐らく、俺と同じく茂みの中に姿を隠して、こちらを窺っている。  
いや、増援を呼ぶ為に逃げたか!？」

九十九は額の汗をぬぐい、回りを見渡す。  
ここで逃がす訳にはいかない。  
ならば…

「こつするまでだ…」

九十九は茂みの中から堂々と街道に歩き出た。

自身を囷にする事で敵の位置を把握するしかないと判断した為だ。

シュツ！！

風を切る音と共に何かが飛来する。

身体強化のお陰か、高速でせまる矢が十分に視認出来る。

だが、掴み取るような危険は冒さない。

左手の蟻帝刃を矢に向けて翳し、念じる。

キンツ！！と無色透明な壁に矢が弾かれた。

滑る者の時は破壊されてしまった障壁だが、この矢には障壁を貫くだけの力はなかったようだ。

「そこだ……」

右手の光剣魚を矢の飛来した方角へ構える。

茂みの中を走る姿が確認した。

十分に当たる距離だ。

冷静に狙いを定め、引き金を二度引いた。

パシユシユ！！

背中に二本の矢が刺さり、男は茂みの中に姿を消した。

「……………」

九十九は油断せず、光剣魚と蟻帝刃を握ったまま、馬車に近づく。

先程殺されたばかりの男。

そして、盗賊に犯されそうになっていた女。

盗賊三人の死体。

生き残った女に近づくと、突然銀光が視界に入る。

「っ!!!」

左手を掲げた瞬間、蟻帝刃の魔術障壁が襲い掛かって来たそれを遮断した。

刃物を握った男が木陰から飛び掛かって来ていたのだ。

「なっ!?!」

刃を止められて動揺する男の額にクロスボウを押し当てる。

パシユツ!!

容赦無く、額に穴を開けた男が倒れた。

「……………これで終わりか!?!」

気を抜かないまま、女に近づく。

「……………」

女が…いや、少女と言える年齢のそれが、俺を睨んでいた。

「っ……………」

九十九は思わず動揺した。

敵に対しては油断はなかった。だから、動揺するはずもない。原因はその少女の容姿にあった。

日本人的な堀の浅い顔でありながら、その瞳はエメラルドのような

深い緑色を帯びていた。

陽光を反射する美しい銀髪が腰の辺りで綺麗に切り揃えられている。まるで、コスプレでもしているのかと思わせる容姿だったが、そこには作られた違和感が無い。

裂かれた服の下から覗く肌は透き通るように白く、その肢体は完全なものを宿しているかの如く美しかった。

それを見た瞬間、ゾクゾクと背中を欲望という名の衝動が走った。九十九の中の本能が叫んでいる。

こいつを征服したいと、自分のものにしなければならぬと。

「くっ！見るな！！」

こちらの視線に少女は裂かれた服で何とかその身を隠そうとするが、大きく避けたその衣には全てを隠すだけの機能は既に無い。

その仕草を見た瞬間、股間部が熱く猛るのを感じた。

少女を舐めるように見ると、首には滑る者にしたものと同じような首輪がされている。

『この少女は奴隷のようです。』

まだ、契約はなされていないようです』

「ああ、そうだな」

指輪の言葉にぞんざいに答えるが、視線は少女に釘付けのまま離す事が出来ない。

「貴様、一人で何を言っている？

それよりも良くぞ私を助けた。

私はアベリア王国の王女。ディアナ・アベリアだ。

私を国に連れて行くのだ。

そうすれば、幾らでも金をくれてやるぞ、どうだ私が……」

眼前の少女が何かを口にしているが、頭には何も入って来なかった。熱が全身を覆い、くらくらと目眩がする。

今、自分はこの少女に酔っているのだと自覚した。

そして、湧き上がる衝動に身を任せなければ、自身が壊れる事を理解し、理性という名の手綱を手放し、九十九は欲望のままに身体を作動させた。

「何を!？」

九十九は少女の首に手を当てた。

「所有者・九条 九十九」

「なっ!？」

少女が驚きと絶望の声を上げるが、そんな事は関係無い。少女を抱き上げる。

「はっ、離せ!!!」

奴隷契約が成立した事で抵抗する事が出来なくなった少女は叫ぶしかない。

「断る。」

お前はもう俺のものだ、俺だけのものだ。

…異界部屋を」

『了解しました』

眼前に扉が現れる。  
扉を開き少女を中に連れ込む。

「なっ、何だここはッ！」

少女の動揺を無視して、少女を抱いたまま目的地へと向かう。  
そして、寝室に入るとベッドの上に少女を下ろした。

「な、なにを…」

少女は動揺したまま、怯えを宿した瞳を九十九に向けて来る。  
それに対して九十九は猛獣が威嚇するように残酷な笑みを浮かべて  
少女の上に跨った。

「い、や……」

少女の悲痛な言葉が漏れ出さぬように、九十九は少女に覆い被さった。

## 第6話 「奴隷姫の驚き」

「ん…んんっ…」

重たい瞼を開く。

ぼやけた視界の中に何か規則正しく同じ動きを繰り返していた。それが、先程まで欲望のままに犯した少女である事を思い出し、上半身を起こした。

「ここに入ってからどれくらいの時間が経っているんだ…」

『凡そ丸二日経過しています』

独り言のように呟いた言葉に指輪は律儀に返答した。

「丸二日…」

制御が効かない程に欲情してたが、そんなにやっていたのかよ…」

九十九は自身の性欲に呆れかえると共に、それに付き合わされた少女に同情した。

ベッドの上には裸のまま全身を体液まみれにした少女が全身の力を失ったように弛緩した状態で眠っている。

彼女の身体を見ると、至る所に昨晩までの行為の痕が確認出来た。呼吸と共に振幅する胸は白い肌の中で乳輪の周りだけに赤い線が引かれている。

それは、九十九が胸に被りついた時に付いた歯形だった。

首筋には赤い内出血の痕…キスマークが残っている。

そして、彼女の股間部から溢れ出た精液がベッドの上に池を作っていた。

「っ…」

股ぐらが充血していくのが分かる。

だが、その欲望を辛うじて抑え付け、九十九は目に毒になりそうな少女の肢体から視線を外すと、寝室を後にした。

バスルームで少女との行為を思い出した九十九は一度、自慰を済ませ、シャワーを浴びて出てきて自己嫌悪気味に呟いた。

「俺の身体はどうなってんだ。」

あれだけやってまだ足りないのか？」

自分の性欲が異常である事は間違い無い。

『恐らく、甲殻熊を食した事で、身体の機能向上と共に、生殖本能も向上したものと思われれます』

「とんでも無い滋養強壮だな…」

馬鹿馬鹿しさのあまり頭を掻くと、冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出すとペットボトルを一気のみした。

「あの娘も水分とか栄養与えないとな。」

あれだけやったら体力が相当失われているはず」

九十九は一人納得すると、キッチンへ向かった。

「ん…」

少女…ディアナは優しく肌をなぞる感覚に意識が浮上して行く感覚に身を任せるまま、目を開いた。

「目を覚ましたか」

「っ?!?!?」

目の前に現れた男の姿に身をディアナは竦ませた。

意識を失う前に自分がどのような辱めを受けたかを思い出したからだ。

だが、弱い自分を見せまいと、直ぐさま表情を切り替え九十九を睨んだ。

「良くも私を辱めたな!!」

「必ずお前を殺してやるッ!!」

痛罵を浴びせかけるが、九十九は平然とそれを受けたまま、ディアナの肌を手を持ったタオルで拭く作業を続けた。

「!?!?」

「お前には俺を殺せないよ。」

お前は俺の奴隷だからな。今正に抵抗出来ないまま、俺に身体を拭かれているのが良い証拠だ」

「くっ！巫山戯るな…ツケホッ、ケホケホッ！！」

叫ぼうとしたところで、乾燥していた喉が痛み、咳を漏らした。

「喉が渴いているんだろう…」

ベッドの横の机の上からペットボトルを差し出した。

「？なんだ？」

ペットボトルを知らないディアナには中に色の付いた液体が入っている事しか理解出来なかった。

「こうして飲むんだ」

スポーツドリンクの入ったペットボトルを九十九は一口飲んだ。まだ、取り出したばかりで冷たい。

「飲み物など必要無い」

「喉がカラカラなんだろう」

「要らない！！」

強い拒絶を示す。

ディアナはこの男がどんな事を言われても抵抗するつもりであった。

「飲め」

だが、九十九が命令した途端、ディアナの意志に反し、身体はペットボトルから水分を口に注いでいく。  
一口嚥下したところで、ペットボトルから口を離す。

「甘い…、甘酸っぱい味がする。

これは一体…。

それに何でこんなに冷たいの…。」

九十九に対する問い掛けというより、独り言のようにそう呟いた。

「全部飲んで良い…。」

「……。」

九十九の言葉には応答せず、ペットボトルの中身を全て飲み干した。あれだけ激しい行為だった、身体の水分をかなり失っていて当然だ。空になったペットボトルを少女の手から取り、デスクに置いた。

「お前の名前は何と言う？」

あの時、聞いたような気もするが、俺の方もおかしくなっていたからな。

全然憶えていないんだ」

「私の名前を聞き逃しただと？」

この大陸でも知らぬ者は居ない程のこの私の名を」

「良いから名前を言え」

「聖アベリア王国 第一王女。ディアナ・アベリアだ…」

命令に従い、少女は素直に名を口にした。

『聖アベリア王国は今、九十九様がおられます、ライオン公国の南に隣接する国です』

「ディアナか…。  
良い名前だ」

九十九がそう言うと、ディアナはプイと顔を横に向けてしまった。

「しかし、王女様が何で、こんな所に…いや、それは後にするか…。  
目も覚ましたし、身体は一応拭いたが清潔にしないと…」

ディアナは自信の身体を見ると、あれほど体液で汚されていた肌は奴隷服を着せられ、馬車に乗せられていた時よりも綺麗になっていた。

「こつちだ」

いつの間にか移動していた九十九は寝室のドアの前で手招きをする。

「……ふん……」

だが、ディアナは拒否するように再び顔を背けた。

「こつちに来い」

九十九が命令すると、ディアナはベッドから降り立ち、九十九の前

に移動した。

「こつちだ」

ディアナの手を引いて洗面所に入る。

既に全裸の状態であるディアナの前で、九十九は服を抜いだ。

「何をする……」

自分の身体を抱くようにして後ずさるディアナを捕まえ、バスタブに入った。

「ここは、浴場か……」

湯気が視界を遮ろうとするが、大理石の壁が水分を滴らせているのを見てディアナは言った。

王族であるディアナに取って、浴場は良く利用するものだ。

だが、水で肌を洗うだけの城の浴場は寒さが残るこの時期にはとても使えない。

釜で沸かした湯で身体を拭くのがこの時期の通例だ。

「暖かい……」

バスタブの空気の暖かさと浴槽から上がる湯気から湯が張られている事を理解した。

（これほどの湯を沸かすなんて…一体どれだけの釜で沸かしたのか。それとも魔術の類に因るものか？）

魔術で湯を沸かす話を聞いた事があったディアナはそう当たりを付

けた。  
警戒しながらきよるきよると辺りを見回していたディアナの背後に  
立った。

「っ…」

背中当たる男の胸板に動揺しながら、男に抱かれるように大きな  
鏡のある壁に移動した。

「な、何だこれは!!」

自分が映る鏡に驚きの声を上げる。

「ただの鏡だ」

「これが鏡だと…信じられない…」

王家で使われているのは水鏡か、青銅鏡だ。  
こんなに明確に姿を写すものが存在するとは…。

「お湯が出るから気を付けろよ」

「?…何を言っている…?」

ツぷ!!」

鏡に驚いて意識を離していたところに、意味が分からない言葉を掛  
けられた。

疑問を投げ掛けようとした途端、顔面に湯が打ち付けられた。

「ぶっプッ、…な、何だこれは!!」

悲鳴を上げて顔を背けるが強く叩き付ける湯に目も開けていられない。

「ああ、悪い悪い」

九十九はシャワーのヘッドを握るとディアナの顔から離し、身体に湯を浴びせた。

「綺麗にしてやるから大人しくしてろよ。  
まず、頭からだな…。目を瞑っている」

頭から湯を浴び、俯くディアナの髪に爪を通す。  
付着した体液や汗を軽く落とすと、一度、シャワーを止める。

「目を開けるなよ…目に入ると痛いからな」

シャンプーを取り、ディアナの頭に浸す。  
髪が長い分、男の自分より使う量が多いな…そんな事を思いながら、  
九十九は髪を洗っていく。

「一体何を…」

目を閉じたまま何かをされている事に耐えかねて、ディアナは目を開けてしまった。

「っ！…いたっ、痛い痛いっ！…何だこれは、目がっ！…」

「ばっか、何やってる！…」

九十九は慌ててシャワーでシャンプーを洗い流した。

シャンプーを洗い流した後、髪にコンディショナーを付け、身体の方を洗う事にした。

手に石鹸を付け、ディアナを後ろから抱くようにして洗う。肩、首、そして胸。

柔らかい胸を揉みし抱くようにして、洗う。

「ふうんッ…」

抑えても漏れる声と柔らかな肌の感触に股間部に熱が宿るのを感じながら、少女の肌を優しく洗う。

全身を隈無く、手も足も指の先まで…。

「これで終わりだ」

理性を保ったまま何とか洗い終え、シャワーで石鹸を洗い流す。

「ふぁ…」

惚けた表情でディアナは九十九にしな垂れ掛かって来た。

のぼせてしまったかかも知れないと、九十九は慌ててディアナを立ち

上がらせると、浴槽に浸かる事なく、洗面所へと連れて行った。

「大丈夫か…」

「……………」

言葉に反応しないディアナを洗面台の椅子に座らせ、バスタオルで濡れた肌を拭き取る。  
綺麗に拭き取ったところでガウンを着せ、綺麗な銀髪をドライヤーで乾かす。

「中々乾かないもんだな」

長い髪の為、乾かすのもたつぷりと時間を掛ける事になった。  
相変わらずディアナは抵抗もしない。

「本当に大丈夫か？」

「風呂は苦手だったか…」

「……………」

返答の無いまま、少女を抱き、居間へと移動した。

居間に入り、テーブルの椅子に座らせスポーツドリンクを与えて暫くすると、漸く意識が覚醒したように、鋭い視線をこちらに向けて来た。

それを確認して、ディアナが眠っていた間に作った料理を温め直す。甲殻熊の肉で生姜焼きを作ったのだ。豚肉のように美味しくなるかは分からなかったが、取り敢えず作れる料理を作ろうと、奮闘した結果だ。人に食べさせる前に勿論、味見をしたが、あまりの美味しさに先に御飯2杯を平らげた。

「食って良いぞ……」

皿に盛った甲殻熊の生姜焼きとライスを彼女の前に置く。

「ふん……」

顔を背けるが、視線は生姜焼きに固定されている。

ゴクリの唾を飲む音が聞こえた。

二日間ともに食べていない。

いや、或いはそれ以上の期間、ともに食べていないかも知れない。それなのに拒絶を止めない少女。

「つつたく……」

流石に苛立って来た。

これ以上、一々命令するのもこちらの気分として良くない。

ここは一つ、一つ、一つの行動を反抗出来ないようにする命令が必要だ。

「命令する。…自分の命を脅かす行為をするな。

他者に危害を受けた場合にも同様だ。

それは俺も例外じゃない」

「どうしてだ」

「俺はお前の命を奪う気は無い。  
だが、謝ってお前を傷つける場合だってあるだろう。  
そうだな…、例えば、謝って俺が放った矢がお前に当たりそうに  
なる事があるかも知れない。」

俺の行動全てを肯定していたら、矢を避ける事も出来るからな」

「私は奴隷なんだろう？」

矢で死んだって惜しくないだろ」

「いや、惜しいね。」

俺はお前を死なせたくない」

「っ……」

九十九の言葉に口を嚙む。

「いいから食べるよ…結構、美味いぞ。」

まあ、素材が良いからってだけかも知れないが…」

「ふん…」

鼻を鳴らすと、ディアナはライスをしげしげと見つめた後、口に入れた。

確認するように咀嚼すると、納得したとばかりに頷いて、飲み込んだ。

そして、生姜焼きの方を口にする。

「う、美味い…。」

なんだこれは…。

味も濃いけど、塩じゃないのか？この味付けは一体…」

醤油と言っても分からないだろうと、九十九は口を開かなかった。

ディアナは何度も驚くような顔をしながら、もくもくと食べ続けた。全てを平らげてもまだもの足りないような顔をしているので、追加で生姜焼きと御飯を大盛りでテーブルに置いた。

姫様とは思えない勢いでそれを平らげて行くのを九十九は満足そうに見続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2350ba/>

---

異世界盗賊譚

2012年1月12日00時59分発行